

Ⅱ 熊本地震を振り返る

1 保護者の寄稿

熊本地震で経験したこと

小学部保護者 北時美咲

4月16日1時25分。本震は昨夜の前震の疲れもあり、いつものまにか寝ていました。叩きつけられるような揺れ、すごい音で起きました。子供達は「怖い怖い」と泣く。私も怖い。「大丈夫だよ」と言う私ですが、心臓の音、呼吸の音が隠し切れません。パパがさえを毛布にくるみ、外へ逃げました。私と息子とさなが逃げようとした直後に、タンス、食器棚、冷蔵庫が倒れ、通れなくなりました。衝撃で窓の鍵が開かず……。何度もひじで叩き、やっと開き、窓から逃げました。裸足だったので色々な物を踏んだと思います。近くにスーパーがあり、車で避難している人が多かったので、引き返し車で行きました。車中で朝を迎えました。熊本かがやきの森支援学校に家族で避難していいですよと連絡をいただきましたが、距離的に近く、被害も少なかった私の妹の家に避難させてもらいました。自宅の瓦はとび、階段の天井は落ち、壁は崩れ、翌日の雨で家中は水浸し。倒壊の恐れがあり危険とのことで、避難指示の貼り紙。住んでいる地域は被害が大きかった所です。大規模半壊でした。放課後等デイサービスのキャンパスの皆様がすぐ受け入れてくださり、バナナやふりかけご飯を持たせ、施設の物資なども頂きました。さえは食べ物に困りませんでした。復旧するにつれ、「さえちゃんお風呂いいよ」と親戚、友達、いろんな人から声をかけてもらいました。毎日キャンパスで日中は過ごし、私たちは家の事ができ、本当に助かりました。先が見えない不安。続く余震。普通に暮らしていたときの事を思いました。一番辛かったのは、子供達はとても怖い経験をして心にダメージを受けたのに、家に帰ることができなかったことです。「いつ帰れるの？」という子供達。心が安まる時がありませんでした。崩れた家を見ると地震の怖い記憶がよみがえり、通るのも怖がっていましたが、今は更地になり、「前のおうち、そこだったね(^)」と言いながら通っています。熊本地震を経験し、たくさんの人からの支援、助け合い、つながりを改めて感じました。一日も早く、皆が幸せな日常になることを願います。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 石川真実

平成28年4月16日1時25分、激しい揺れとともに室内は真っ暗、8歳の息子の呼吸器のアラームが鳴り響きました。室内はあらゆるものが倒れ、リビングには食器棚のガラス破片が散乱。睡眠時に呼吸器が必要な息子にとって、停電は何より怖いことでした。どうしたらよいのか茫然としている私に、同じマンションの方が、避難しないと危ないよ！と声をかけて下さいました。夫が助けを求めに行ってくれていました。近所の方3人が荷物をまとめる私の手元、足元を懐中電灯で照らし、医療機器からケア物品など大量の荷物を車に運び込み、車いすの息子を抱えて階段を降ろして下さいました。私たち家族だけでは、避難は到底難しいものでした。夫はすぐに仕事へ行かねばならず、医療的ケアの必要な長男、2歳の次男の3人で自宅を後にしました。一番の心配は、気管支炎を起こし、病院に通院中だった長男でした。呼吸器と吸引器の電源、休める場所を確保したいという思いで、車で自宅から5分ほどの東区役

所へ向かいました。前日に保健師さんより非常電源があると聞いていたからです。駐車場は満車、屋外でたくさんの方が地面に座り毛布にくるまっていた。電源は職員の机をかき分けていった奥にあり、息子を連れて行くのは困難でした。

車を走らせていると、ラジオから情報が流れてきました。熊本市民病院が倒壊の危険があり、入院患者を避難させていると。一瞬息が詰まりました。鳥肌が立ち、「泣きながら車を走らせました。熊本市民病院は息子が生まれたときからお世話になっている、命を繋いで下さっている大事な病院です。主治医や看護師さん方の顔が思い浮かび、ひたすら無事を祈りました。

熊本かがやきの森支援学校で朝を迎えましたが、息子達は落ち着かず、睡眠がとれませんでした。長男は顔色が悪く、病院にかかって、とにかく休ませなければなりません。主治医より、熊本市民病院での診療が不可能であると聞き、県北の実家へ帰りました。

実家の近所のクリニックへかかると、吸入器を手配して下さったり、大変親切にしてくださいました。ひどい悪化はありませんでしたが、長引く咳で胃瘻トラブルが生じ、重症心身障がいと病気を併せ持つ息子の病院探しに苦労しました。もちろん主治医からの診療情報提供書はありません。こういう病気の子どもは診たことない、と敬遠されることもありました。

熊本で生活が再開したのは、電気と水が復旧した2週間後でした。そこに至るまでは、長男を連れて実家と自宅の往復。ケアをしながらの後片付け、訪問看護も受けられず、ケアを代われる人がいないことは、やはり大変なことでした。しかし、こうして命が助かり、無事に自宅に戻れたことを、ただただうれしく思いました。私たち家族は身近な熊本の方々や全国の方々の支援と愛を頂いて、元気に過ごしています。この場をお借りして、感謝申し上げます。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 高岡智加

平成28年4月14日、この日は夕方から娘が寝てしまい21時頃起きたので、迷いましたが、お風呂に入れ洗い場で娘を寝かせて体を洗っていた時に大きな揺れが起きました。自分の体も支えられない状態で娘の顔だけ抱え上げてとにかく溺れないようにと必死でした。揺れが収まり辺りを見ると、湯船のお湯がほとんどなく、脱衣場と廊下が水浸しでした。その日は子供達は机の下に寝かせ、家族でかたまって過ごしました。テレビでいろいろな情報を知るたびにどうなってしまうんだろうと不安でした。16日の本震後は停電したため、近くの公園に車で避難しました。いつも子供達が遊んでいる公園が車でいっぱいになっており、異様な光景に恐怖を感じました。とにかく安全な場所に居ようと車中で過ごしました。その日の午後には電気は復旧し、自宅に戻りました。水道とガスは止まったため、水を近くの給水所へ何回も水くみに行きました。そこで色んな方に声をかけてもらい、救援物資の情報なども知ることができました。食事は家にあったレトルトや缶詰などを食べていました。娘は胃ろうからの注入食のため、ミキサー食を作るのは難しかったので、栄養剤で過ごしました。食事が変わると排便など体調の変化が心配でしたが、幸い体調を崩すことなく過ごせ

ました。地震の数日前に定期受診をしており、娘に必要な薬や栄養剤が十分にあったことはとても助かりました。胃ろうがあることもあり、体の清潔も心配でした。電気ポットやガスコンロでお湯を沸かして洗髪したり、清拭したりはしていましたが、なかなかさっぱりできませんでした。自衛隊の仮設風呂に行くと、娘の体の状態などを考慮し、優先して入れてもらえました。入浴中も「お手伝いできることがあれば言って下さい」と言っていたき、帰りも娘に「また来て下さいね」と笑顔で声をかけてもらい、とても嬉しく思いました。その後、ライフラインも復旧し、生活も安定しました。熊本地震からもうすぐ1年になります。時間が経つにつれ、日々の生活の中で地震のことを思い出すことも少なくなりました。しかしあのとき本当に多くの人の助けと支えで乗り切れたこと、日々感謝の気持ちを忘れずに、これからも過ごしていきたいと思います。

熊本地震を振り返って

小学部保護者 佐藤絵美

熊本地震から1年が経とうとしています。熊本城をはじめ、まだまだ地震後と変わっていない所がたくさんあります。自宅はブロック塀が倒れ、家の中はぐちゃぐちゃにはなりましたが、運よく地震前と変わらない状態で過ごすことができます。地震が起きた時、子供達はいつものように寝ていたので、特に怖がることもなく過ごしました。大人達の方が初めてのことで気が動転し、揺れを感じたらとりあえず外に出たりと、オロオロしていました。ご近所の家も倒壊しているところもあったりと普通ではない周りの様子に、ただただ驚きました。割と近所に家族が住んでいるので、皆で集まったり、一緒に過ごすようにしていたので、子供達も安心できたのではないかと思います。日頃から、食べ物や水、息子の医療的ケアに必要な物は備蓄していたので困ることはありませんでした。今回の地震は夜中だったので最小限の被害ですみましたが、子供達と一緒にいない時に起こっていたら・・・と考えてしまいます。いつでも家族と連絡する手段やそのときどうすればよいのかともう一度確認し合い、防災意識を高めていきたいです。

熊本地震の経験を通して

小学部保護者 古閑美香

4月14日、今まで経験したことのない大きな地震が起きました。慌てて2階に寝ていた子供達を降ろし、家族6人外へ飛び出し、不安な夜を近くのスーパーの駐車場にて、多くの方々と一緒に過ごしました。

翌朝、数回の余震はあっていましたが、家に帰り、もう大きな地震は起こらないだろうと眠りについた夜中、再度の大地震に庭へ飛び出しました。西区は港に近いので津波が来るかもしれないと放送があり、逃げ場所を迷っていました。昼間に、娘の通っている熊本かがやきの森支援学校の先生より、安否確認の際、「何かあったら来て下さい」と電話を頂いていたことを思い出し、そのまま学校へ避難させていただきました。先生方は温かく迎え入れて下さり、大変感謝しております。おかげで不安な日々を学校で過ごすことができたため、その後の余震にも「ここは大丈夫」と子供達も

安心していたようでした。

この学校に通っている娘は、避難中に熱を出したことがありましたが、市民病院の先生・看護師さんが来て下さり、診ていただくことができました。また、酸素に関してもしばらくは自宅から持ってきたボンベにて対応しましたが、学校に届けていただき、助かりました。

上の娘も避難所にいるお兄さんお姉さんに遊んでもらったり、ボランティアの手伝いをさせていただいたことで、少しずつ不安な気持ちがなくなっていったように思います。その娘が食事を配る手伝いの際に、皆様から感謝の言葉をもらうことにより、自分から「ありがとうございます」「いかがですか」と声をかけている姿を見て嬉しく思いました。

地震が起きたことにより、家も被害に遭い、不安で不自由な日々でしたが、多くの方々に助けていただき、大切なことを改めて考えさせられたようにも思います。あの日からもうすぐ1年が経とうとしています。この経験を生かし、日頃から備えておくことが大切だとつくづく思いました。

熊本地震を振り返って

中学部保護者 佐藤裕子

いつもの夜、私と三人の子供達はリビングで過ごしていました。「今から帰る」との夫からのメールに「気をつけて」と返した直後、大きく揺れ始めました。「地震だ!」ハッとして座位保持椅子に座った娘を抱き降ろし、四人でテーブルの下に潜りました。その後も続く余震に朝まで車中で過ごしました。時には車が横転するのではと思う程の揺れに恐怖を感じました。夫は、震源となった益城町を通過して帰宅するのですが、通行不能となった道を迂回し数時間かけて帰ってきました。地震直後から、携帯電話が不通となり連絡がとれない中不安の帰宅でした。

翌日、我が家には実家から母や妹達が集まりました。古い実家で夜を過ごす不安からでした。皆が寝静まった夜一時半前、もの凄い揺れに飛び起きました。津波警報発令。隣接する家からはガラガラと瓦の落ちる音。駐車場から道に出るにはそこを通らねばならず、少し離れた場所にある妹の車へ走る事にしました。夫が娘を、私が息子を抱いて走り、全員が一台の車に乗り高台にある文化ホールへと急ぎました。渋滞の中ホールに辿り着き、普段はリハーサル室として使われている一室で朝まで過ごしました。

避難所となったホールは停電し、水も出ませんでした。日が明けると水と少しの食べ物が届きました。しかし、嚥下困難のある娘は胃瘻チューブや注射器を持って出なかった為、十分な水分も食事もとれませんでした。薬やオムツなどすぐに必要な物を入れた非常持出し品を車に積んでいたのですが、その車ごと自宅に残してきたからです。私は、余震に恐怖を感じながらも避難生活に必要な物を取りに戻りました。

避難所となったホールも地震の被害が大きく駐車場で過ごす人が多くいました。私達も母や妹達と車を並べました。娘は自宅から持ち出した経管栄養剤とレトルトパウチの介護食を食べました。昼は車いすに座ったり、テントの下で寝転んだり機嫌もよく過ごしていました。夜は車のシートに横になり私の隣でよく眠っていました。皆が

元気な事に安堵していましたが、二日目の夜、体調が急変しました。肺炎とてんかんの発作を起こしたのです。熊本大学病院で受け入れて下さったので、夫が娘に付き添い、私は二人の息子達と避難所に残りました。

避難所では職員の方の懸命の働きと県内外からのボランティアの方々に助けられました。食事は支援物資の中からパンや水、おにぎりということが多かったのですが、時には温かいご飯の炊き出しもありました。多くの人は夜避難所で過ごし、朝そこから出勤したり自宅の片づけに帰ったりしていました。顔見知りも増え、お互いに声を掛け合うようになりました。次第に余震も減り、自宅に電気や水が来るようになり車の数も減っていきました。私達はそこで十三日間過ごし、娘の退院の日に自宅に戻りました。

今回の地震で六年ぶりの入院をすることになった娘。地震後すぐに、かがやきの森の先生から学校が避難所となった事をお知らせ頂きました。しかし私は、余震の中を学校まで移動する事、母達と離れる事への不安があり地域の避難所を選びました。学校が再開して先生から「親戚の皆さんも一緒にいいですよ」と声をかけて頂きました。安心して避難できる場所がある事を心強く感じています。今回の経験を今後に生かしていかなければと思います。

慣れ親しんだ風景が大きく変わり、傷が癒えるにはまだまだ時間がかかります。当たり前前の日常に感謝し日々を大切にしていきたいと思います。

地震から学んだこと

江津湖療育医療センター分教室小学部保護者 西山けい

4月14日の前震の日、私は次男の入院先から実家に預けている子供達を迎えに行く途中で地震に遭いました。突然の大きな揺れに何が起きたのかわからず、このまま車で病院に戻るべきか、実家に行くべきかを悩みました。大きな揺れだったので、病院に行くと邪魔になると思い、実家を選びました。周囲は停電しており、車のライトで道を進み、家に着くと携帯の明かりで玄関のドアを開けました。家の中は滅茶苦茶でしたが、幸いにも全員無事でした。私を心配していた長男が、私の顔を見て安心した途端に泣き出したのを覚えています。

余震が続く、幼い娘達が離れたがらなかったのも、気にしつつも次男の所へ行けたのは、本震の日の昼頃だったかと思います。(その間、病院から無事との連絡あり。) 大きな病院のあちこちにひびが入り、院内には全国から集まった救援チームがたくさんいました。その様子を見て改めて地震の大きさを実感しました。

病棟では、スタッフがいつも通りに仕事をしていました。いつもと違ったことは、停電に備え、ベッドに氏名や病名、薬などが書いてある手書きの紙が貼られていたことです。また、余震のたびに呼吸器のチェックにも来られました。水不足で体を洗えない時でも、使い捨てのもので清潔を保ってくれていました。スタッフ自身も被災している中で、少しでも病院の日常を守ろうと努力してくれている人達に、次男は大事にされていると感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。今回の地震では、家族の絆を再認識でき、当たり前のように日常を守ってくれている人達がいることを改めて教えてくれたできごとだったと思います。

地震を経験して思うこと

高等部保護者 西嶋美恵

息子は24時間人工呼吸器装着、酸素療法、気管吸引、胃瘻注入などの医療的ケアが必要な子です。

前震は、一時的に停電しました。その時主人がすぐに風呂に水を張りました。その後主人は仕事場に行き、不在になりました。懐中電灯と酸素ボンベとアンビューを用意し寝ている時に、本震に襲われました。携帯の地震警報が鳴り響く中、息子達を守りながら、呼吸器を押さえるので精一杯でした。揺れの途中で真っ暗に。懐中電灯をつけ、息子の呼吸状態を確認しました。息子はやや固まった表情でした。下の子は祖母の手を握ったまま顔もこわばり震えていました。けれどもみんな怪我はありませんでした。「大丈夫だからね！」と声をかけ、自分の気持ちを落ち着かせながら、外出する時のようにバギーに呼吸器、吸引器、ケア用具を載せ、息子を移動させ車の中へ乗せ込みました。呼吸器と加湿器の電源は車の中で確保できました。下の子も車に避難させ、急いで最小限の荷物をバッグに詰め込み、最後に車に乗り込みました。そして市民病院へ避難しようと思っていたと、ラジオから聞こえてきたのは市民病院倒壊の恐れ……。情報に驚愕していると、携帯に主人からの連絡があり、安堵しました。お互いの無事を確認し、自宅駐車場で待機することに。夜が明け、近隣の様子を見て再び自宅に入ると、生活ラインは止まっていました。ただ昨夜主人が張った風呂の水でトイレはなんとか使用できました。呼吸器の電源を車から発電機に切り替え、主治医と連絡相談し、近くの病院へ電源確保のために家族4人で避難することになりました。余震が続く中、一晚を過ごし、ライフラインの復旧のめどもつかず、この先主人の夜勤が続く状態が想定され、主人の提案で地震被害が少なかった主人の実家のある天草へ、私と2人の息子で避難する決断をしました。

この地震で道路状況もわからない中、医療業者には酸素の濃縮機器を八代営業所から天草の実家まで、連絡からすぐに運んで届けてもらいました。天草へ向かう道路も宇土周辺までは途中段差があったり、路肩が崩れていたり、まだ地震から日も浅かったので緊急車両が道路を行き交っていました。

実家の避難生活では、地震の恐怖、環境の変化で下の子が体調を崩してしまい、息子の医療的ケアで24時間離れられない私は、一人では病院へ連れて行ってやることも困難な状況になり、隣町の医療体制が整っている施設に相談し、息子を受け入れてもらいました。また隣接する特別支援学校の先生方にもお世話になりました。下の子は、隣の校区の保育園に受け入れてもらい、同年齢児と過ごす場ができるようになりました。地震以降、私もようやく下の子に一对一で寄り添えるようになり、精神的に支えてあげることができました。

今回、遠くに避難する決断ができたのは、地震数日前に在宅の物品1ヶ月分支給と内服薬1ヶ月分の処方があったばかりで、手元にたくさんあったことと、日頃から学校へ通学し、外出移動になれていたことが幸いしたのではないかと思います。また、息子の修学旅行などで主治医に書いてもらっていた医療の情報提供書をいつも保険証と持ち歩いていたため、避難先での施設受け入れがスムーズにいました。

今回の熊本地震では「決して災害時は一人ではやれない」ことを痛感し、避難先で

支援して下さった方々、関わって下さった方々に感謝し、人と人とのつながりの大切さを知りました。今後同じようなことがあっても同じ避難ができるとは限りません。災害は備えも大事ですが、その時の状況での判断も重要な避難につながるように思います。そして、当たり前の生活に何よりも感謝して生きなければならないと思いました。

熊本地震の記録

高等部保護者 長山文代

9時過ぎた。そろそろ次女をお風呂に入れないと・・・。そう思いトイレ誘導をしていた。突然、ドオオオン！！と体が左右に揺さぶられた。自宅は8階建てマンションの6階。慌てて立ち上がる次女を抱き寄せ、自室のベッドでうとうとしていた長女の名前を呼んだ。返事がない。もう一度名前を叫んだら返事があった。怪我がないことを確認した。大きな地震だから避難すること。足を怪我しないために靴を履くこと。避難できる服に着替え、外は寒いから上着を羽織ること。携帯の充電コードを持参すること。2人の娘に言い聞かせ自分も着替えた。次女は17歳、重度の知的障害。言葉は出ない。手つなぎ歩行はできるが6階から避難階段を怪我せず降りなくてはならない。手早く準備を済ませ玄関に3人集まり、もう一度娘に言い聞かせた。「○○ちゃん、地震が来てここは危ないから避難するよ。コートを着て、靴を履くよ！」いつもなら出かけるときには何かしら抵抗を示す次女は、私の強めの口調に素直に従った。ドアを開け、ブレーカーを落としたら、主人が帰ってきた。「怖かったね。」主人の声に安堵し力が抜けそうになった。もう一度部屋の中を見回した。ブレーカーを落とし、ガスの元栓と水道栓を閉めて家を出た。動かないエレベータを素通りし、隣の避難階段にきた。ここでも子供たちに言い聞かせた。「絶対怪我しないように。階段を踏み外さないように。」次女と手をつなぎ階段を下りた。「1、2、1、2、・・・」長女もすぐ側についてくれた。主人は3人を見守るように一緒に階段を下りた。1階まで無事にたどり着いたとき、子供たちをほめ主人と顔を見合わせた。近隣の銀行の駐車場に身を寄せると、マンションの住民の方たちもぞくぞくと集まった。誰もがマンションは倒れるか潰れると思った。お互いに体調などを気遣った。次女は続く余震のたびに地面が震える気持ち悪さで、居ても立っても居られないと体全身で表現し、ふらふらと歩きだそうとする。そのたびに抱き寄せるを繰り返した。携帯にはメッセージが届き始めた。担任の先生とも連絡が取れ、次女の学校の保護者とも安否確認をした。遠方の旧友たちがSNSで支えてくれた。近隣の人々は指定避難所に向かうか思案中だが、我が家は次女を抱えてのそこへの避難はまず無理。駐車場にしゃがんでいても困難になる。主人はマンションに毛布などを取りに行き、駐車場から車を乗り寄せ、娘たちを乗せた。近隣の方と情報を交換し、震源から離れた職場に行くことを伝えた。高齢者の福祉事業を運営しているため、利用者の安否や被害状況も確認する必要がある。ここから車で20分。途中の道路が寸断されていたら？職場がもし壊滅状態だったら？様々なことが脳裏を過る。余震で軋むガソリンスタンドで給油し職場に向かった。道路はところどころ亀裂が入り水道管が破裂していた。0時過ぎ、仕事場は静まり返って迎え入れてくれた。余震が続く不安な一夜を過ごした。次女は不安感を

紛らわすためにキーボードを大音量で鳴らし始めた。緊張して手はじつりと湿っていた。

夜が明け始めた。職員の無事を確認した後、利用者と家族の安否確認をし、本日は休業する旨を伝える連絡を始めた。同時に県外に居る長男とも連絡が取れた。実家の家族や友人たちに無事を知らせた。主人の友人たちからは、職場にメールが続々と送られてきた。ある程度連絡が済んだら自宅が気になり始めた。単独行動は危険なため、明るいうちに家族みんなで動こうと判断。だが問題がある。散乱した6階の自宅に、階段を使い次女を連れていくのは非常に危険を伴う。罪悪感と断腸の思いで次女をマンション駐車場の車に残し、主人と長女と私の3人で階段を駆け上がった。玄関のドアはストッパーで開放し、私は玄関付近の片付けをした。主人と長女はテレビや棚などの耐震補強をした。長女が飼っていたザリガニもケースごと持ち出し一緒に避難することにした。あっという間に1時間が過ぎた。次女が気になる。つらい気持ちで階段を下りた。遠くから次女の姿が見えた。うつむいている……。血の気が引いた。普段は上を向く姿勢が多いからだ。夏場、車内に放置されて亡くなる乳幼児の死亡事故が頭をかすめた。「○○ちゃん！！」大きな声で呼ぶと、ふわーっと頭を起こした。

「ごめんね、ごめんね」と何度も謝った。職場に帰る途中、次女が好きな惣菜やパンを買った。店が営業していることと商品の陳列の少なさに驚いた。職場のライフラインは問題無かった。再び連絡業務を始めた。余震は依然続いていた。睡眠は取れる時にと仮眠を取るが、なかなか眠れない。次女はキーボードでリズム音楽を聴きながら眠っている。みんなが静かになり私もうとうとし始めたとき、次女がキーボードの電池が切れたと、起こしに来た。電池を入れ替え一緒にベッドに戻り、次女に布団をかけた。もう少し眠ろうと布団にもぐったとたん。「ドドオーン！！！」建物は軋み、天井のファンはブランコのように揺れた。思わず声を上げた。みんなも飛び起きた。付けっ放しのテレビから後に本震とわかる。自宅のマンションにはもう戻れないかもしれない。愕然としながら夜が明けるのを待つしかなかった。次々に明らかになる被害状況。生まれて初めて経験する大地震。膝ががくがく震えだした。

夜が明け、利用者と家族の安否確認をし、しばらく休業する旨を伝えた。職員と手分けして自宅訪問もした。訪問中、近隣が断水していることが分かった。職場は地下水を使用しているため、水道は無事だ。家族にいつでも給水に来るように勧めた。そして近所の方にもいつでも給水に来て下さいと伝えてもらった。職場に戻り連絡業務を続ける中、ポリ容器など持参し給水する方が増えてきた。外の水道には「水出ます。いつでもどうぞ！！」と貼り紙もした。どこかの大学生が避難所に水を運びたいとトラックで乗付け、温泉を運ぶような大きなポリタンクに水を入れていた。やがて救援物資が届き始めた。主人は全国規模の研究会の会員であり、東日本大震災の時被災した会員に物資を届ける手配をしたことがあった。東北が壊滅状態の時、新潟の会員に物資を届け自家用車に積み込み運んでもらった。水や食料、おむつなどは勿論のこと、ガソリンを運ぶための携行缶もたくさん送った。今度は、東北や全国から、大牟田に物資が集まり、会員が熊本に届けてくれる。今回は震源地から離れているここに物資が集まった。震源地付近で被災した会員や家族が物資を取りに来たとき、情報交換もしながら精神的にも支え合った。救援物資が山のようになり始めた頃、次女の学校が

避難所になっている情報が入った。足りない物資を保護者にSNSで尋ね、自宅の片付けに行く途中に届けた。学び舎は体育館や廊下に人が溢れ、駐車場はペットの犬も多くいた。本校の児童生徒家族は体育館での避難所生活は厳しく、また医療的ケアが必要な子供もいるため教室棟に避難していた。水や食料、おむつや使い捨て手袋、手指消毒液など先生方が荷物を下すのを手伝ってくれた。校舎が臨時避難所になり、先生方がお世話をされていた。ご自身も被災されているのにと胸が熱くなった。仕事の連絡業務等があるので次女と主人は職場に残し、長女と2人で自宅の片付けに行った。本震の後、マンションはいたるところにひびが入っていた。恐る恐るカギを開けると、棚や子供たちの机までも倒れている。書棚の耐震棒は外れ、天井に穴が開いている。リビングのドアには内側から食器棚がもたれ掛かり中に入れない。食器類が飛び出して粉々に割れているのが見えた。前震の日に作っていた料理も鍋ごとひっくり返っている。トイレの水も揺れでこぼれてしまっていた。とにかく女2人ではどうすることも出来ず、主人と次女がいる職場に戻り、今度は娘たちを職場に残し、主人と2人で片付けに行った。何とかこじ開けリビングに入り込むと、愕然とし言葉を失った。もしここに残っていたら、間違いなく命は無かった。時間を決めて短時間で片付けに入った。毎日少しずつ片付けに行った。移動途中に見かける県外の車の多さに目頭が熱くなった。救援活動をされていた。職場に給水に来た近隣の方から、「うちは、水は出ないけどこれならあります。」とイチゴ農家さんが手作りのイチゴジャムをくださった。農家の方が野菜をくださった。感謝の言葉をたくさんいただき、水の有難さを改めて感じた。次女は避難所生活で生活リズムが崩れてきた。支援相談員の先生に、職場から近いデイサービスを紹介してもらい通い始めた。初めての所は慣れるまでどうかと心配を余所にあっさり慣れてしまった。明るく迎え入れてくださったスタッフの方に感謝している。地震が収まった現在も利用を続けている。次女は学校再開まで、デイサービスとショートステイを利用することができた。職場も部分的に事業再開し始めた。やはり利用者と顔を見合わせるとお互い安心する。「100年生きてきてこんなにしつこい地震は初めてだ」と言われる方もいれば、「戦争の方が怖かった」と言われる方もおられた。1日も早く通常に戻ることができるよう祈りながら業務にあたった。宅配便が再開し、友人からの物資が届くようになった。たくさんの水、電池、栄養ゼリー、風邪薬、ビタミン剤、湿布、清潔用品等。箱を開けるたびに涙が溢れた。

熊本地震からやがて1年。今もなお全国や海外からも温かいメッセージが寄せられ、物資や義援金を送られ、各種イベント等が熊本復興に向けて開催されている。感謝の気持ちは言い尽くせない。職場の近くでは、今も毎日がれきを積んだトラックが災害ごみを受け入れる処理場へ走っている。日々の生活は、元の穏やかさを取り戻しつつある。マンションの住民の方や近隣の方々との挨拶や会話が、地震の前より多くなったのは確かであり、いざとなれば命がけで支え合うことができると確信した1年だった。

熊本地震を経験して

熊本支援学校卒業生保護者 藤岡浩子

(平成23年度 熊本養護学校卒業 藤岡祐機)

熊本地震からもうすぐ1年。つい先日の事のように感じます。

① 4/14 前震

揺れた瞬間『ただ事ではない』と直感しました。息子のいる2階に駆け上がろうとしても、真っ直ぐ上がれない。その時でした。話せないあの子の『わぁ...』という声が聞こえたのです。声というより、身体全体から湧き出る恐怖だと思いました。私はあの子が産まれて初めてあんなに恐ろしそうな声を出すのを聞きました。とにかく、怯える手を取り、トイレに逃げ込み、身長174cmの大きいあの子を抱いて『大丈夫、お母さんおるけんね』と言いつつ、どうしていいのかわからない。車で近くの駐車場に避難して、家に戻ったのはもう明け方でした。

② 4/16 本震

15日の夜、揺れに怯えながらも、いつものように2階で寝ようとしたのですが、息子が私たちの手を取り『下に降りる』と訴えました。私たち夫婦は『大事な時は祐機の言う通りにしよう』と決めていますので、1階へ降りました。そして2時間後の本震。すぐさま車で避難し、家に戻ったのは昼前。あの時、2階にいたら逃げる前に怪我をしていたと思います。

我が家は80代の高齢者が3人。そして息子がいます。息子は重度の知的障害。自傷他傷もあります。普通に生活していても『冷たい目』は注がれます。『冷たい声』は聞こえてきます。その息子連れ避難所に行くことはできません。避難所という選択肢は我が家にはありませんでした。

③ 避難(愛隣館)

途方に暮れていたところに山鹿市の愛隣館から『大丈夫ですか?』と、一本の電話をいただき、私たち家族は山鹿へ向かいました。道は隆起し、亀裂が走り、周りの景色も一変している中、すれ違う車は殆どが県外からの災害復旧車両。福岡、兵庫、京都…何時間かけて来てくれたのだろうか、心から感謝しました。

④ 避難(熊本かがやきの森支援学校)

次に助けていただいたのは、熊本かがやきの森支援学校でした。我が家の現状を人づてにお聞きになった五瀬校長先生から『こちらにどうぞ』とご連絡をいただきました。

20日の夜から1週間お世話になり、学校のご配慮により保護者控え室を使わせていただき、本当に心から休まることが出来ました。おかげさまで息子もパニックを起こすことはありませんでした。

懐かしい先生方、避難されていた保護者の皆さん。顔を見るだけで『学校だ...』と安堵し、同じ学校で過ごしたお母さんたちと、子どもの事を話し、とにかく無事で良かったと手を取り合えることに、どれだけ救われたかわかりません。

学校では先生方が泊まり込みでした。日中は『生徒たちの家をまわってきます』と支援物資を片手に足早に出掛ける先生、『我が家もいろんなものが倒れています

が大丈夫』と、私たちには心配かけまいと笑顔で答えてくださる先生。先生方も皆、被災されているのです。出掛ける先生に『いってらっしゃい、気をつけて』と声をかけ、ありがとうと手を合わせることは出来ても、情けないかな、私は、息子と我が家の事だけで精一杯でした。

そんな中、4/23の夜に熊本支援学校前校長の高橋先生から『備蓄水と発電機で避難されている皆さんが助かっておられるそうですよ』という、メールが届きました。

⑤ 大切なつながり

遡ること、2011年の8月。息子が熊本支援学校に在学中の頃、私はPTA役員として、知的障害教育校の全国大会に出席。2011年は東日本大震災の年であり、被災された方から、当時のお話を聞かせて頂きました。

『職場では多くの方が亡くなりました』『当日は学校行事があり、息子は早く帰り、無事でした。行事がなければ、どうなっていたかわかりません』と。

『2人の障害児を抱え、避難所にも行けず、ご近所の方にパンをもらいました。これが1度の経験（震災）だったので、どうにか過ごせました。ただ、もう2回目は無理です』とお話くださいました。

この子たちを抱えて被災するということはこういう事なんだ。大変な状況下、全国の同じ立場の私たち、現実を伝える為に来て下さっているのだ。私はお二人の話を聞きながら、涙が止まりませんでした。

このお二人の思いを『必ず熊本に持って帰る』と思ったのです。あの時、ものすごく強い気持ちが自分を動かしたことを今でも覚えています。学校に帰り、皆と話し、備蓄水の購入、当時第Ⅰ学部（現在の、熊本かがやきの森支援学校の皆さん）も在籍していたので、人工呼吸器等の電源確保のため、発電機を購入。それから保護者の皆さんにお願いして防災リュックの準備をしました。

高橋先生からのメールを読んだ時、地震以降ずっと張り詰めていたものと、『あの時のお二人の気持ちが届いたんだ』という気持ちが一緒になって堰を切ったように涙が溢れました。

⑥ これから

地震から約1年。不安で苦しい時間を過ごしました。忘れ得ぬ記憶となりました。でも、人の繋がりや温もりを知りました。

手をさしのべていただいた2カ所の皆さま、全国からのご支援、国からの補助。東北からの繋がり。

我が家に関しては、今でも『人には頼れない、自分たちでどうにかしなくては』という気持ちに変わりはありません。ただ、今回の事を経験して、何か困った時は、少しだけお願いしてもいいのかなと思えるようになりました。

でも、そこには『お互いさま』『おかげさまで』『お世話になります』という気持ちを、いつも持ち続けてこそだと思います。

2 職員の寄稿

熊本地震を振り返って

教頭 富永佐世子

平成28年4月15日午前1時頃、本校は県施設課の要請を受け、臨時避難所として開設いたしました。その日は、金曜日の授業日でしたが、児童生徒の安全確保と避難者受け入れのために学校を臨時休校としました。何とか出勤してきた職員で無事と被害状況を確認し、月曜からの登校に備えて散乱した物の片づけと受け入れ準備を行っていました。当時、臨時避難所として開設された本校に避難して来られたのは、益城町在住の中学部生徒家族の一家族だけでした。避難してくる生徒の不安を少しでも取り除くことが出来ればと、普段生活している中学部の教室に避難してもらいました。

臨時避難所として開設していた為、教頭が宿直当番として学校の事務室に泊まり、翌朝5時に学校長と交代する予定でした。正面玄関を開け、避難者受付名簿を準備して避難者を待ちましたが、結局日付が変わった16日の午前1時を過ぎてもだれも避難して来られないため、教室棟避難家族の様子伺いに行った後、仮眠をとろうと事務室中央付近に横になった途端、本震が発生しました。

「ゴーーー！」という地響きにも似た音とともに学校が揺れ始め、その揺れはどんどん強く、激しくなっていました。私は、慌てて飛び起きました。飛び起きた瞬間、横にあった鋼製棚が西側のテーブルに倒れ、ガラスの扉が割れて中の書類が一気に飛び出してきました。私自身、ガラスが散乱し鋼製棚が倒れかかっているテーブルに必死しがみつき、揺れが治まるまでの間をひたすら耐えたことを記憶しています。そしてまだ揺れが完全に収まらないうちに地域全体が停電となり、学校も真っ暗になりましたが、本校には自家発電装置があるのですぐに復電すると自分に言い聞かせていました。しかし、電気の心配よりも、教室棟に避難されている在校生家族の安否が心配になり、事務室を飛び出しました。校舎の至る所にガラスが多用されているため、あの猛烈な揺れではガラスが割れ、散乱しているとばかり思っていました。廊下などのガラスは一枚も割れることもなく、暗闇の中では何の変化もないように思われ安堵しました。そして、中学部棟へ向かおうと職員室前を通り過ぎたところで、外の駐車場付近に目をやると、沢山の車が校門の外に数珠つなぎになっている光景が目に入り、思わず外に飛び出し、本校駐車場への車の誘導を行いました。その頃、ちょうど西日本警備の警備員も巡回で来校されており、その警備員に駐車場への誘導を託し、私は避難者の校内受け入れを行いました。押し寄せて来られるたくさんの避難者を受け入れることに無我夢中の中、近隣に居住している教職員や事務職員が我が子等を連れていち早く駆けつけ、避難者の受け入れや復電操作等に奔走してくれたこと、大変心強く、嬉しく思いました。

発災後、無我夢中で地域住民避難者を受け入れていきましたが、その為に在校生の安否確認がおくれ、本震発生後約1時間30分が経過した、午前3時に総務部ライングループが作成され、携帯メールとラインを併用しながらの安否確認を主事・主任を中心に開始して行きました。また、事務室を本部として開設し、ホワイトボードに児童生徒・職員の安否確認状況、様々な連絡事項、伝言、提供された支援物資等の事柄

を書き出して行きました。ホワイトボードが書き出した事柄で一杯になったら、デジタルカメラで撮影した後に消すという事に徹していきました。電話回線が繋がりにくい中、本校総務部はグループラインやライン電話、携帯メール等複数の連絡手段が確保できていたため、滞りなく連絡を取り合い、更には継時的な記録としても残すことができました。

大地震の発生で混乱する中、様々な職種・立場の違う職員が、自身も家族も被災しているにもかかわらず、学校が心配になってたくさん駆けつけてきてくれました。発災時から避難所運営に携わっていただいた、総務部等の職員も、後日談として話されたことですが、自宅が大きな被害を受けておられて、建て替えも視野に入れて検討されていると聞きました。また、居住地域の地震による被害があまりなかったと言いながら、たくさんの差し入れを抱えて、駆けつけてくれた職員もいました。被災当初は、本校が臨時避難所として開設されていることを、熊本市自治体に把握されていなかったために、避難者への食料提供もままならない状況でした。当然、運営している職員に食事を提供できる状況ではなかったのですが、差し入れでいただいた物をみんなで分け、空腹を凌がせてもらいました。その時に食べた「サバの缶詰」は私の思い出の味となりました。

避難所運営では、被災当初から市担当者が派遣されるまでの間、約2週間を学校長を中心として、限られた学校職員で運営を行ってきました。学校職員の出勤要請については、まずは自身の身の安全確保や家の片づけ、家族の水・食料の調達等に当たってもらいました。また、学校が避難所となりたくさんの方が避難されている状況から、職員が出勤しても車を止める場所もないことや、職員玄関にも避難されている方がいること、職員室は支援物資の保管場所、食事準備場所となっていたなどの諸事情が背景にあったため、大半の職員は自宅待機とし、随時子どもの安否確認などのための、家庭訪問や避難先訪問等を行ってもらいました。その際、必要に応じて、本校に届いている支援物資を一緒に届けるようにしました。

マニュアルなどない中での避難所運営であったため、随時、学校長または教頭がメンバーを招集し、細かい確認を行なうように心がけていきました。そして、避難所運営が軌道に乗り出した2日目からは、朝食の片づけが一段落した午前9時頃に朝のミーティング、夕食の片づけ後の午後8時頃を目途に夜のミーティングをメンバーを招集して行うようにしました。朝のミーティング内容は、各業務のチーフの確認と業務担当者、メンバーの確認、業務内容、1日のスケジュール及び昨日からの引き継ぎ事項の確認等です。夜のミーティングでは、各業務内容の報告や翌日の食事メニュー、食事提供時間の確認。翌日のスケジュールやメンバーの確認等を行っていきました。ミーティングの時間を予め決めてはいましたが、様々な業務に追われ、夜のミーティング開始時間が午後10時になり、終わるのは11時を過ぎることも度々ありました。そして、翌朝は朝食の用意のために、午前6時頃には出勤してもらうという日々が続きました。尚且つ、宿直のローテーションにも入ってもらいました。被災後、混乱した状況下ではありましたが、限られた学校職員で避難所運営を行ったことで、円滑できめ細やかな避難所運営ができたのではないかと感じています。しかし、対応した職員も被災者であるにも関わらず、早朝から深夜まで、労を惜しまず、献身的に頑張っ

てくれました。本当に頭の下がる思いです。

この度の熊本地震では、熊本の自然豊かな光景や普段の生活がいつまでも続くものと、何の疑いもなく思っていました。大規模災害など、他人ごとであって、自分には降りかかってこない、熊本では発生しないことだと思い込んでいました。しかし、大規模災害はどこで起こってもおかしくないということを、改めて学びました。また、災害時はたくさんの方が学校に避難して来られるということを如実に体感することもできました。

この教訓をしっかりと生かすことができるよう、私にはこの体験を少しでも多くの学校関係者に語り、各学校が危機感を高めて、事前に備えていくことができるようにしていく使命があると考えています。

熊本地震を振り返って

事務長 重松憲明

平成28年4月14日木曜日、21時26分の前震から始まった熊本地震について、事務室に勤務する1人の事務職員として思ったことを残しておこうと思う。本校に赴任して2週間が経過し、まだ学校のことについてほとんど知識がない中に地震に見舞われた。前震以降の3日間で起こった大きな地震はおおむね以下のとおりである。

4月14日（木）21：26 震度6弱（M6.5）前震

4月14日（木）22：07 震度5弱（M5.8）

4月15日（金）00：03 震度5強（M6.4）

4月16日（土）01：25 震度6強（M7.3）本震

4月16日（土）01：45 震度5弱（M5.9）

⑦ 熊本市西区春日の観測地点（本校に最も近い観測地点）での数値

この他に震度4以下の地震が多発し、いつまた大きな揺れがくるのかと不安と緊張の日々が続くことになる。

前震後、体育館を避難所として使用可能かとの連絡が施設課から私の携帯電話に入った。被災した熊本市を、住居のある東区から西区に抜け学校に到着、校舎の被害状況を目視で確認後、日付が変わった4月15日の深夜1時に、校長の決断で臨時的な避難所として開設した。開設後は避難者名簿の作成等をしながら朝を迎え、休校となった4月15日は、被害状況の把握と報告、翌週からの学校再開に向けての片づけ等を行った。その他、週末の期間中に避難所の宿直対応をする職員のシフトなどを管理職で検討して決め、前日から睡眠をとっていなかったため、その日の宿直を務める教頭におまかせして家路についた。このときは余震がしばらく続くものの、さらに大きな地震が数時間後に起こるとは全く想像していなかった。4月16日の本震後には数

百人の近隣住民の方が避難されていたが、本校は臨時的な避難所であり、熊本市からの職員派遣や物資の配給等がなかったため、運営には本校の職員があたっていた。混乱した状況の中、避難者の安全な環境の確保と、学校の施設・設備の管理という大きな役割を事務室が担うことになる。

このような大きな災害を経験し思うことは、ライフラインが断たれた場合への備えと、施設・設備の日常の管理がいかに重要かということである。水道や電気の供給が一時的にない状況は経験したこともあるが、2週間以上水道が使用できない状況で、衛生的な環境を維持することの困難さを思い知った。学校単体での備えには限界があるが、できる限りの準備をしておく。また、施設や設備について常に現在の状況を把握しておかなければ、災害による損傷なのか、もともとあった損傷なのか判断もつかない。小さな損傷も日常の点検から早期に発見し補修をしておくことで、被害も最小限に抑えることができる。

私は、赴任後まもなく今回の地震に遭遇したが、「開校後3年目の新しい学校で、校舎も新たに建築された耐震性に優れた校舎であり、かつ損傷などが全くない状況で今回の地震に遭遇したこと」、「事務室のスタッフが開校時から勤務してきた職員で構成されており、施設・設備の状況を概ね把握していたこと」、「営繕に詳しいベテランの事務職員がいたこと」などから、頻発する地震の中でも、混乱することなく適切な対応を速やかに取れたと思う。

「備えあれば憂いなし」・・・備えることは大切であるが、何に対しどう備えるか、今回の熊本地震を経験して学んだことが「ライフラインが断たれた場合への備え」と「施設・設備の管理」であった。今後の事務職員としての業務と、日常生活での備えとしてこの経験を教訓としたい。

避難所運営を振り返って

小学部主事 金澤姿子

16日の本震で、夜が明けると同時に足の踏み場もないほど物が散乱し、窓が外れ、壁が崩れた自宅に戻り、何とか床の上のものを片付けて学校に電話しました。無理はいえないけど、よかったら来てほしい・・・という教頭先生の言葉に学校に来てみると、自治会の方が交通誘導をしておられ、すでに校内は車の置場もない状態になっていました。予想以上の避難者数に驚きながら校内に入ったのは、11時頃ではなかったかと記憶しています。まず本校の児童生徒とその家族が避難している教室棟へ行ってみると、不安そうな顔のお母さん方に遭遇。大変だったですね・・・と言うより早く、一般の避難者の方々が覗き込んできて怖いから教室のブラインドを全部降ろしてしまった、と言われます。そうなんですね・・・と言いながら、見回っていた時でしょうか、一人の男性が寄ってこられ、「向こうの避難所で自分たちは足の踏み場もないほどだ。こっちは随分人が少ないけど、どうしてこっちにも避難させないんだ。」と言われま

す。本校の子どもたちの状況を説明し、数回のやり取りの後、何とか納得していただきましたが、今後このトラブルはもっと続くだろうな・・・と思い、すぐに管理職に報告。数か所に「医療的なケアの必要な人が避難しています」という貼り紙をしたことで、それを見ながら「大変ですね」と言われるようになり、ほっと一安心しました。その日の夜は、届けられた非常用毛布の入ったアルミの袋をひたすら破き続け、お年寄りと子どもを優先に配りました。次の記憶は、食事です。夕方になり、近くの指定避難所である城西小学校に食べ物が届いているから取りに来てほしい、という連絡が入りました。数人で取りに行くと、いつも交流でお世話になっている優しい先生がとても厳しい顔をして立っておられました。また、市役所の職員の方が、クレームが多くて交代もできないからずっと働きづめであること、パンは到底数が足りないから見られないよう新聞紙で覆って裏道を通って帰ってほしいといったことを話され、事態が深刻であることを実感しました。

避難所には当初、犬を連れて避難をされた方がたくさんいらっしゃいました。動物が苦手な私は雰囲気で行くのか、移動するたびにすべての犬にほえられてしまい、御迷惑をおかけしました。しかし、一緒に生活するとすると、恐怖感の方が先立ち、自分が一避難者としてここにいたら、とても居心地が悪かったらうなあと正直に思いました。また、癌を患っておられ、痛みや食欲不振を訴えられる方には、薬剤師さんを探し出して応急処置として薬の飲み方を教えていただいたり、流動食しか食べられない方にミキサー食を作って提供したり、痴漢行為に対応したり、朝意識不明で発見された方を救急搬送したりと、様々なことがありました。本校の立地している地区は、古くからある住宅地で、高齢者がたくさん避難していらっしゃいました。病気の方、高齢者の方、赤ちゃん連れのお母さんといった、社会的弱者といわれる人たちが安心して避難できるよう、また、動物を連れて人が安心して過ごせるよう、ニーズ別の避難所があるとよいなと感じました。

本校の児童生徒に話を移します。本校には前震後から常時10家族程度が避難されていましたが、比較的いろいろな物資はあり、一見困り感はない様子でした。しかし、長期化してくると、普段はミキサー食を胃瘻から注入している子どもが栄養剤の注入が続いたことにより体調を崩したり、ケア用品が不足したり、支援物資として送られてきたミネラルウォーターでは器具の洗浄が十分にできなかったり、感染症を予防する加湿器には水道水しか利用できなかったりなど、様々な問題が発生しました。そんな中、近所の方が「お宅の学校にはお粥しか食べられん子どもがおるど?」と言って、毎日お粥や雑炊を届けてくださったり、生活用水をタンクで運んでくださる方など、たくさんの方に助けていただきました。また、被災者のニーズは時を追って変化していきます。初めは助かった安堵感と余震に対する恐怖感でいっぱいでしたが、そのうちに直面したのは、

- ①清拭だけでは体の清潔が保てない
- ②訓練を受けられないので、体が固くなってきている
- ③終日やることがないので反応が鈍くなってきている
- ④家に片付けに帰りたいけど子どもだけを残していけない
- ⑤特に被害が大きかった熊本市民病院に通院している子どもたちが、慣れない避難

所生活で体調を崩し始めている

といった問題でした。①については、学校に訪問看護師の方に来ていただいて、学校の施設を使って洗髪・体洗いができた子どももいたこと、②については、後日、熊本県こども総合療育センターはその準備をしていたにもかかわらず、保護者にその情報が届いておらず、逆に一般の避難所には他県からボランティアPTが毎日来ていて、マッサージを受けられたケースがあったこと、③については、近隣の食堂がツイッターで呼びかけたところ、高校生ボランティアがたくさん集まったので、何かボランティアをさせてほしいと継続してくてくれるようになったため、本校に避難してきている子どもとその兄弟と一緒に遊んでくれるようお願いしたことで、子どもたちが生き生きとしてきたこと、④については、本校の児童生徒が普段利用している放課後等デイサービス事業所が、被災した職員が我が子を伴って出勤し、数日後には開所してくださったこと、また、相談支援専門員に困り感を訴えたことで、母親の相談に乗っていただいたケースもあったこと、⑤については、被災した市民病院の職員が市役所職員としてチームで巡回されている中に、地域連携室に在籍している職員がおられ、本校の子どもたちの困り感を訴えたところ、すぐに主治医と連絡を取っていただき、主治医が本校まで自転車で駆け付けてくださったことで、子どもたちと家族に安心が広がりました。特に医療面については、1週間もすると医師同士連携をとっていただき、支援物資を届けていただいたり、取り寄せていただいたりと、大変お世話になりました。ここでこんな支援が受けられる、こんな困り感がある等、もっと機関を超えて共有できていたらと思うこともありましたが、無事5月10日に学校を再開できたことは何よりでした。私は、避難所運営では、主に避難した御家庭の支援にあたりました。3食避難食を運ぶ中で、家族のプライバシーを守るよう努力しながらも異変がないか、困っていることはないか気を配ることで、いろんな思いを聞くことができたり、書ききれないほどの人たちとつながったりすることができました。

本震後は10日間、毎日16時間程度休みなく避難所運営にあたり、最終日は宿直もこなしたわけですが、その時は全く疲れを感じず、実を言うとあまり記憶もありません。もし、今度被災したら・・・その時のためにどう備えるか・・・考えていくことはもちろん重要ですが、想定できないことがあってもいろいろな人とつながりながらその時に尽くせるベストを尽くしていけば何とかかなるのかな、というのが今の一番の思いです。

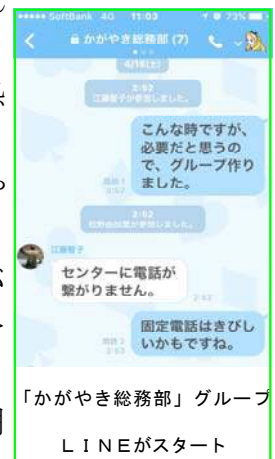
熊本地震の記憶

中学部主事 西 友香

前震が来たとき、私はキッチンで夕食の片づけをしていた。目の前には食器棚。ひどい揺れのたびに、観音開きの扉が大きく開き、食器を吐き出す。ガチャガチャとコップが割れる音。とっさに後ろにいた母をかばった。母は次男のためにぜんざいをよそっていた。母の悲鳴。長男は風呂に入っていた。洗顔クリームを塗った間抜けな顔で慌てて風呂から出てきて家族の笑いを誘った。経験したことのない揺れで、いろいろなものが倒れ、壊れはしたが、とりあえずみんな無事。前震のあとは少し冗談を言い合う余裕もあった。それから30時間も経たないうちに、あの本震が来るなどとは夢にも思わないで・・・。

本震は、就寝しようと立ち上がった瞬間だった。身体が横に飛び、何かに打ち付けられた。まっすぐ立てない。近くにあった机が前に倒れ、パソコンもプリンタもありえない場所まで飛んでいった。夫と息子たち、両親の無事を確認し、外へ出た。隣の家の天井が落ちている。隣人の名前を大きな声で呼び、人が家の中にいないことを知り、安堵。家族6人でとりあえず車の中に避難した。激しい揺れはその後も何度となく繰り返し、駐車場で過ごすのも怖いと感じ、近くの小学校に移動した。家族の誰もが無口になり、地震への恐怖にじっと耐えていた。

本震発生から90分が過ぎていたと思う。学校の様子、生徒や先生方の安否が気になるものの、家族を抱えて下手に動けない。こんな時はLINEが役に立つかもしれない。思い立って「かがやき総務部」のグループLINEをつくった。各学部等の状況を総務部でお互いに情報交換しつつ、並行して「かがやき中学部」のLINEで中学部の生徒や先生方の状況把握に努めた。夜が明けるころまでには、中学部の生徒や先生方の安否確認が完了。



朝を迎え、この先どうしたらよいのだろうと途方に暮れた。小学校はいつの間にか避難所となり、人であふれかえっている。「足の不自由な父は、この避難所暮らしは無理だ。トイレすら使うことができないだろう」と感じた。家族6人、夫の実家を頼って、人吉へと向かった。高速道路は使えなかったが、何とか通行できる県道を通り、3時間以上をかけてたどり着いた。人吉は無事だった。そこにはいつもの日常があり、これまで目にしてきた地震の被害が本当に現実なのだろうかと思うくらいだった。

本震の翌日、私は家族を人吉の義父母に託して学校に向かった。人吉のディスカウントストアで車に積めるだけの水と米と食糧品を購入。亀裂の入った道路にハンドルを取られながら車を走らせるのは恐ろしく、「またここで大きな揺れが来たら？」という恐怖心と闘いながらの移動だったが、「災害支援」の文字を掲げた宮崎や鹿児島ナンバーの車列を見つけ、勇気をもらった。「どうか力を貸してください」と何度も何度も手を合わせた。

学校に何とかたどり着いたとき、目に飛び込んできたものは見慣れない避難所の光景だった。事務室や校長室、職員室がなぜか避難所運営の本拠地となっている。数名の先生方で、数百人の避難者のお世話をしていた。実はそこからの記憶があまり無い。

やったことも聞いたこともない避難所の運営に、私もいつの間にか加わっていた。「食事準備班長」を任命され、避難所に身を寄せる人の3度3度の食事をどのように賄うか、学校に来ていた職員で話し合い、決め、実動していった。

城西小学校に駐在する陸上自衛隊からは炊き立てのご飯の提供。カップ麺やレトルト食品、缶詰等の支援食糧も届き始めた。

近所のお弁当屋さんや飲食店経営の方から「豚汁100食分くらい持ってきます。」「味噌汁ありますよ。」と毎日のようにありがたい申し出。

全国展開のカレーのチェーン店が「カレーを届けます。」とわざわざ名古屋から来て300食のカレーをふるまってくださった。

近くの農家さんが「もう売り物にはならんけん」と言ってトマトやキュウリをたくさん届けてくださった。

宮崎から有志数名が訪れ、「口蹄疫の時に助けてもらいましたから・・・」と、ありったけの有機野菜を使って、おいしい豚汁を心を込めて作ってくれた。

福岡から大勢で駆けつけ、バーベキューの炊き出しをしてくださったことも！口にはおぼったお肉のおいしさにふと涙が出そうになった。

北九州から来た方の「今、何がほしいですか？」との問いに「カセットコンロ」と答えたところ、北九州まで戻り、次の日渋滞の中何時間もかけて、カセットコンロを8台も届けてくれた。

「仕事が終わってからきました」と支援物資を届けてくれた福岡の若者。「明日も来ます」と笑い、車の中から手を振る姿に、人が人を思いやる気持ちの尊さを感じた。

人の善意とはなんとありがたいことか。そう感じて泣かない日は無かったと思う。そんな中で一番印象に残っているのは、この避難所のことを知った方が、イチゴのケーキをたくさん作って届けてくださった日。切り分けたケーキを小さい子どもから順番に、小学生、中学生・・・へと渡していったところ、その日、避難所に居てボランティアをしてくれていた高校生全員の分まで数が足り、高校生以下の子どもはみんなケーキを食べることができた。「神様はいるかもしれない」ふとそんな気持ちになった。

もちろん避難所の運営は全て順調というわけでもなかったし、避難所内には常に「いつもの生活ができない」という不安や不満が漂っていた。ちょっとしたことがきっかけとなりクレームとなって噴出しそうな空気もあった。特別支援教育に携わる者が比較的得意な「他者理解」「他者へのサポート」はこんな時に力を発揮するものだを知った。要支援の避難住民の状況をうまく聞き取り、必要なサポートを行う・・・このことがごく自然に行われていくのを目の当たりにして、避難所の運営を共にしていた先生方に尊敬の気持ちが湧いた。「この仕事に就いてよかった」と誇らしささえ覚えた。避難所運営が軌道に乗ったころ、朝早くから避難所を出て出勤する方のために、早朝の食事を準備するようになった。パンやおにぎり、魚肉ソーセージ、ビタミンが入った機能性飲料など・・・。玄関の近くに準備した朝食には「お疲れさま、行ってらっしゃい、大変だけど頑張りましょう」のメッセージがこもっていたと思う。

避難所の運営に没頭しながらも、気になるのは学校がいつ再開になるかということだった。避難者の皆さんが無事に帰宅するということが大前提ではあったが、学校の主役はやはりこの学校の子どもたち・・・新学期が始まってすぐの一番ウキウキする

楽しい時期に、登校できないことはどんなに寂しいことだろう……。そう思って、私は学校再開に当たっての道すじを考え始めた。

・・・相変わらず余震が続いている。学校が再開しても、大きな余震から身を守ることは最優先課題。2度の地震で学んだことは、大きな揺れが来たら収まるまでは、とにかく飛ばされないように自分の身体を支えるしかないということ。火の始末をすとか、退路を確保するためにドアを開けるとか言うが、まずその場から動くことが困難だ。授業中に大きな揺れに対応するとすれば、まずできる限り子どものそばを離れないでおくこと。横にいる子どもに覆いかぶさってでも怪我をさせないようにすること。座布団や頭を守るものが近くにあればいい。それをつかんで子どもの頭を守ろう。震度6強の揺れが2回襲ったのに、学校の校舎の外壁やガラスはほぼ無傷だった。ただ、教室内のあらゆる場所で物が落下したり飛んできたりはあった・・・それで怪我をするのは怖い。備蓄食料は熊本地震の前から備えていたが、保護者から持たせてもらっていたものは2日分の食料であった。支援物資が届くまでに自分の備蓄食料が1日分でも長くあるとよい。食料は多めにしたい。これまでは温めずにそのまま食べられるものを持たせてもらっていた。今回の経験から、長引く状況で温かい食事がどれほど気持ちを和ませるのかを知った。カセットコンロと鍋があれば、レトルト食品もおいしく食べられる。カセットコンロを学校に常備しよう。非常用電源が使えるなら電子レンジでの調理も可能となる。ぜひ電子レンジを学部に1台備えよう。子どもの安全を守るため、朝の打合せでは支援体制を必ず確認しよう。マンツーマンの支援体制が難しくても、支援体制を学部の職員で共通理解しておくことはとても大事。余震が続く状況に備え、学部主事もできるだけ学部ホールにいるようにしよう。・・・

次々と今なすべきことが浮かんできたので、「学校再開に向けて」という文書にまとめることにした。

学校再開のかじ取りは予想以上に難しく、困難な課題が山積していた。避難されている住民の方々の今後の生活はどうするのか。避難所運営の終了をだれがどのように決めていくのか。学校だけではどうにもならない問題を一つずつ、関係者と相談しながら解決に導くことはとても大変で、絡んだ糸を解くような作業だったに違いないが、管理職の先生方は根気強く対応に当たっておられた。しばらく自宅待機を余儀なくされていた職員も4月25日からは出勤できる状況となり、学習環境の復旧や避難生活を送る児童生徒の家庭訪問等を行う業務を担った。5月8日には避難所としての役割を全て終えた。

学校再開を5月10日と決めたものの、また課題が持ち上がった。いつも給食を提供してもらっている共同調理場から連絡があり、数日間は簡易給食しか提供できないということだった。簡易給食のメニューを見ると品数が少なく、児童生徒にとって食べづらいものもあったため、栄養面で不安を感じ、主菜を加えることにした。学校給食の食材を扱っている業者に直接掛け合い、湯煎にかければ食べられる食材「筑前煮」「肉団子」「照り焼きチキン」等を購入。職員が食材を湯煎にかけ、日頃から再調理を請け負っている業者にいつものように加工してもらうことで、何とか児童生徒に提供することができた。

学校再開の日から、温かいおいしい食事を提供することにこだわったのは、「学校はいつも通りだよ。安心していいよ。」ということを見学生徒たちに感じてもらいたかったからである。登校した見学生徒の笑顔、給食をおいしそうに食べる姿から、逆に私たち職員が励ましをもらった。学校が日常を取り戻し、喜びと安堵感に包まれた日。きっと忘れない。

地震を振り返って

高等部主事 吉田浩幸

4月16日土曜日1時25分に本震の地震が熊本で発生。自分自身は東京にいたため、何も知らずに熟睡。夜中の3時ごろに、教頭から地震の連絡を受ける。高等部職員、生徒の安否確認を連絡網で回す。眠る暇もなく、職員、生徒の安否確認のやり取りを行う。朝の7時ごろには、職員、生徒の無事も確認できひと安心。この時ほど、ラインの有難さを感じたことはなかった。

テレビをつけると、熊本地震が全国ネットで放映中。東京で熊本のニュースを見るのは、不思議な感覚だった。

熊本空港が被災し、飛行機が欠航となったことを知る。福岡便の飛行機を手配し、帰ることにした。12:30発の飛行機だったが、いろいろなアクシデントが重なり、関西空港経由でやっと福岡についたのは19:30だった。そのため、福岡に宿泊し、月曜日に西鉄とJRを乗り継いで荒尾駅（荒尾駅より先は運休）に到着。ものすごい渋滞を抜けて、やっと自宅に戻った。幸い自宅は、ほとんど被害がなくひと安心。

火曜日から、臨時的に避難所になった学校に出勤。体育館、会議室、職員室廊下等、避難してきた人々であふれかえっていた。（700人程度）停電はしていなかったが、水道は止まっていた。トイレの水は、雨水をためて流す設備が整っていたので、地震後4日間は水を流すことができたが、今はバケツで流さないとダメになっていた。とりあえず、隣の小学校のプールからバケツリレーでトイレ用の水をタンクに溜めた。大変な重労働のため、雨水タンクからポンプを使って、トイレ用のタンクに水を溜めることにした。タンクからも、スイッチを押すとバケツに水が出るようにしたので、トイレを衛生的に保つことができた。

救援物資をもとに、避難者の食事の準備を行う。お湯を入れるだけで200食の炊き込みご飯ができる段ボール箱にはいったアルファ米を初めて作ってみた。簡単にできて、味も美味しかった。便利な物があるのだと、改めて感心した。

その後は、何回か学校に泊まったりして、避難所の運営を手伝う。夕食のおかずが無いときは、拠点となる物資配給所まで出かけ、支援物資を直接受けとったりした。自衛隊の方々がてきばきと動かれ、とても頼もしく感じた。

4月28日からは、避難所の運営が市の職員に引き継がれ、学校再開に向けての動きとなった。

今回の地震による被害は、大変なものだったが、避難所の手伝いをしていて感じたことは、自衛隊が頼もしい。支援物資は、すぐに集まる。みんな、何かしら人のために動こうとする。ということだった。



地震を振り返って

訪問教育主任 松野由加里

私の自宅は県北にあるため本震の際も揺れは大きかったが、自宅に被害はなかった。ただ、自宅は海岸近くで津波注意報が出ていたため、念のため高台に避難し、避難している車中で訪問教育の職員、児童生徒の安否確認を行った。全員と連絡がつき、とりあえず全員の無事が確認でき安心した。この地震による訪問教育の児童生徒の状況を記しておきたい。

<避難所への避難>

心疾患のため酸素療法等を行っているR児は、とりあえず家族で車に避難した。数日車中で過ごし、その後避難所となっている近所の中学校に避難し、畳スペースのある特別支援学級を家族で使えるよう配慮してもらった。5月の連休までそこで過ごし、その後被害はあまりなかった自宅に戻った。その間、業者による酸素濃縮機の手配や訪問看護師の訪問、R児の食物や衛生管理に必要な物品提供等R児を囲む人たちの協力が多く寄せられた。

<父親の職場への避難>

気管切開、酸素療法、経鼻経管栄養、夜間人工呼吸器使用等を行っているM児は、車中避難していたが、県北にある父親の職場で快く受け入れてもらえたため、家族で避難した。5月の連休まで避難生活を続けたが、入浴がなかなかできないM児のために避難先まで訪問入浴サービスの業者が来てくれ、清潔を保つことができた。

<車中避難>

酸素療法、経鼻経管栄養等を行っており、体調が不安定であったK児は、家族で車中避難の後、本校に1泊の避難をした。その後自宅の被害はほとんどなかったため、自宅に戻った。親戚やくまもと江津湖療育医療センターからの物資提供、地区の民生委員からの声かけもあり、何とか自宅での生活を再開した。

<県外避難>

常時人工呼吸器使用、胃ろうによる経管栄養等を行っているT児、Y児は、自力で熊大病院に避難入院した。数日後さらに重篤な患者の避難に備え九州内の他県の病院に避難してもらえないかという依頼を受け、T児はK大病院へ、Y児はM大病院へドクターヘリで移送された。T児はK大病院から直接帰宅したが、Y児は体調が安定しないため、熊大病院にドクターヘリで再入院した。

今回の地震が児童生徒に与えた影響は大きく、少しの余震でも気持ちが不安定になったり、緊張が強くなったりする様子が見られた。長引く余震で心身共に疲弊し、体調が悪化した生徒、保護者もいた。しかし、そのような状況の中でも児童生徒、その家族を囲む人たちの献身的な働きは家族を支え、立ち上がる大きな力になったと思う。現在もそれぞれの自宅には何があってもいいように、児童生徒の生活に必要な物品をスーツケースに詰めて準備されている。日頃の備えは大切であり、保護者のお守りとして心の支えとなっている部分も大きいと感じる。熊本地震を経験して思うのは、人と人のつながりがとても大切だということだ。人はやはり人のために動こうとするもの、助け合おうとするもの、人ってやっぱりすごいと痛感した。

熊本地震を振り返って

江津湖療育医療センター分教室主任 江藤智子

4月14日の前震時、私は山鹿の自宅にいた。これまでに経験したことがない地震に、思わず炬燵にもぐり込み、揺れが収まるのを待った。その後、すぐに分教室児童生徒、学部職員の安否確認を行った。児童生徒が生活している「くまもと江津湖療育医療センター」（以下：センター）には教頭が、学部職員には私が連絡を入れた。職員の中には自宅が被災し、続いて起きるあまりの揺れに避難している者も多かったが、児童生徒は全員の無事を確認できた。

学校は翌15日は休校となった。教頭から翌朝7時に分教室の建物の確認をして報告するようにとの指示を受け、ほとんど眠れずに夜が続いているような状態のまま、自宅を5時過ぎに出発して分教室へ向かった。前震で高速道路が益城付近で陥没し、全面通行止めになっていると聞き、普段、植木熊本間を利用する高速道路は使わずに、3号線から北バイパス、57号線とつないで分教室までやってきた。時間が早いこともあって、その日はまだ渋滞もなく、6時半ごろには分教室へ到着した。間もなく到着した事務長と一緒に教室、職員室、倉庫、外回りの被害状況を確認した。教室内は花瓶が2つ倒れて水がこぼれていた程度であったが、職員室、倉庫はプリンターや電子レンジが床に落ちて破損、重戸棚も倒れて物品が散乱していた。建物の大きな被害はなかった。事務長は報告のため本校へ、私はその後出勤してきた職員と共に職員室や倉庫の片付けを行った。教室の被害はなかったため、月曜日からは普通に授業ができると考えていた。

山鹿はほとんど何も被害がなく、その晩は普段通りに就寝した。そして16日深夜の本震。全く予想もしておらず、ベッドから跳ね起きてすぐ横のテーブルの下にもぐり込んで揺れが収まるのを待った。しかし、なかなか収まらず、まだ揺れている中で家族の安否を確認した。センターには電話がつながらず、センターのスタッフに電話をかけて児童生徒の安否確認を行った。児童生徒は全員が無事であったが、センターは4月に開所したばかりの第3病棟のスプリンクラーが破損して水浸しになったり、余震や断水があったりしたため、体制が整うまではより安全なホールで生活し、他施設からの応援や全国各地からの支援物資等で乗り切ったと聞いている。分教室職員は自宅被害がかなりひどかった者もいたが、幸いに身体はみんな無事だとの確認が取れ、安心したところであった。

本震後の分教室の被害状況は1階教室やトイレは部屋の壁のクロスにひびが入っていたり、天井のエアコンがずれたりしていた程度であったが、2階倉庫は前日に元に戻っていた重戸棚が倒れてガラスが割れていたり、テレビが床に落ちて画面が破損していたりとひどいものであった。駆け付けた他の職員と一緒に、割れたガラス等、ある程度の片付けをした後は、再び揺れがくることを考えて倒れた重戸棚等はしばらくそのままにしておくことにした。

この後、しばらく職員は自宅待機となり、私は本



校での避難所運営に関わることになった。避難所運営については他で記されると思うのでここでは記述しない。毎日が大渋滞で、朝晩片道2、3時間程かかって出勤していたが、私の自宅はほとんど何も被害がなかったのが苦にはならなかった。疲れはあったと思うが気持ちが常に緊張している状態で、きつさを感じることはなかった。ただ、本校から自宅へ向かって行くにつれ、被災地から普段の生活へとだんだんと変わっていくのがとてもいたたまれないような感じがしていた。この間の記憶は避難所運営に関する事以外ほとんどないが、自宅と避難所を往復する途中で、他県からの避難物資を載せたトラックや給水車、救急隊員の姿等を見ると、よく涙があふれてしまっていたのを思い出す。友人からもたくさんの応援メッセージをもらった。本当にありがたかった。支援は現在も続いているが、本当に感謝している。

当時、熊本市内の学校は全て休校中だったため、センタースタッフの一部は子どもさんをセンター内に預けて出勤されていた。しかし、期間が長引くに連れ、場所の対応が難しくなり、センター側から分教室を使いたいとの依頼があった。そこで学校再開前の数日間、分教室をお貸しした。

学校再開日が決まった。再開前に職員で掃除をし、倒れた重戸棚等も元通りにした。センターの担当者からも建物の被害状況を確認していただいた。

始業式、入学式から間もない時期に休校となったため、新しいクラスでの活動も始まっていなかった。5月10日。学校再開。ここからが新学期の気持ちで頑張ろうと学校生活をスタートさせた。

熊本地震を振り返って

主任事務職員 津嶋ゆかり

4月14日(木)前震が発生した時、私は近所のスーパーで買い物をしていました。突然の大きな揺れに何が起こったのかわかりませんでした。脳裏に浮かんできたのは家で留守番をしている3人の子ども達で、長女に電話をするけれども一向につながらず、家に帰り着くまでの5分間は生きた心地がしなかったのを今でもはっきり覚えています。自宅は本校から車で5分くらいのところにあり、裏が山だったため危険を感じ、「母ちゃんの学校に避難しよう」と子ども達を連れ、本校の駐車場に避難しました。本校は震度7にも耐えられる設計がされていますが、やはりガラスが多く使われている校舎の中に避難するのは怖かったからです。駐車場にいた時に近隣の住民の方から「ここは避難所ではないのですか？」と何度も言われ、その度に「申し訳ありません」としか言えず、近隣の小学校に行くようお願いをしていました。日付が変わった深夜、本校は臨時避難所として開設されました。

私達家族の他に数家族が車中泊をしていましたが、避難所を利用する方はいませんでした。翌日、校舎内外の点検や災害復旧などを終え夜遅くに帰宅しました。子ども達は自宅に帰るのは怖いと言って、本校の近くの実家に泊まりました。私だけが自宅に戻り、その夜は私と犬だけだったのです。前震のせいで一睡もできてなかったのも、こたつに入ったまま寝入っていました。泥のように眠っていた深夜、本震が発生しました。大きく横に揺さぶられながら貧弱なこたつの中にもぐり「このまま家につぶされて死ぬのかなあ」と思っていました。でも、子ども達のところに行かないと！と揺

れが収まった直後、着の身着のまま犬を抱えて家を飛び出しました。この時も電話が繋がらずLINEで実家にいる兄達に「かがやきの森に避難して！」と送り続けました。よく訓練などと言われている『落ち着いて行動を』とは程遠い行動だったと反省しています。

本校に向かう途中、もう1つ心配だったのが宿直している教頭先生の安否です。とにかく無事を祈りました。私は本震発生から10分後くらいに学校に到着したわけですが、子ども達もすでに到着しており、「2回も地震があったのにそばにいてごめん！」と抱き合いました。校舎の中に入ると、教頭先生が停電で真っ暗な廊下におられ、無事を確認し本当に安堵しました。ホッとしたのも束の間、「早く中に入れて！」と近隣の方が大勢詰め寄せ、パニックに近い状況の中、教頭先生と2人で避難者の誘導をし、そのまま目まぐるしい避難所の運営が始まったのです。

突然始まった避難所の運営の形ができるまで、事務室を本部として構えました。本震後、学校に駆けつけられた数名の職員で運営をしていくことになりました。私は電話対応、支援物資の受け入れ、設備やその他様々なトラブルの対処、情報収集に追われました。最初の3日間、近隣の小中学校や特別支援教育課、各ボランティア団体などから頻繁に電話がかかってきて、物資や避難者の状況などを聞かれ、私は事務室から離れられない日が続きました。刻一刻と状況が変わる中で受け答えをしなければならず、「ちょっと待ってください」と言ってその度に校長先生や教頭先生を探しに行くような時間はありませんでしたので、あらかじめ正確な情報を常に把握しておく必要がありました。限られた人数で効率よく動くために、全ての情報を本部に集め、ホワイトボードに書き残しました。物資や食事の提供などの記録もすべて残すことで、最優先に手配してもらう物資や今後不足していく物資などが必然的にわかるようになっていったのです。しかし、圧倒的に足りないのは人手でした。寝ることはもちろん、座って休むこともままならない、終わりが見えない状態でひたすら動いていました。本震から24時間が経過した深夜に校長先生と話し合いました。「私達だけでは限界です。避難者の中からボランティアを募りましょう。事情を話せばきっと理解を得ることができます」

翌朝、校内放送でボランティアをしてくださる方を募りました。多くの方が志願してくださいました。「ただじっと座って避難していても仕方なかもんね」と言ってくださり、本当に有難かったです。「あなたも私も被災者です」という気持ちが避難所の中に広がり、雰囲気も変わり始めました。私達家族は2週間くらい避難所で生活することになったのですが、私は避難所の運営に携わりながら、時々体育館にいる子ども達とご飯を食べたり休憩したりしていました。でも、なかなかそばにいてあげられることができず、母親としては本当に駄目だったと思います。小学校に入学したばかりでまだまだ甘えん坊の末娘は、時々「母ちゃん・・・」と事務室にやってきて、離れたがらないことも度々でした。「子どもと仕事、どっちが大事なの」と言われ、返す言葉もありませんでした。

地震発生から学校再開まで心身ともに本当に疲れました。一部の避難者からの心無い言葉に傷ついたり、子ども達のそばにすらいてあげられず、家族よりも仕事を優先させて母親としてどうなんだろうかと、心が折れそうな時も多々ありました。私も家族

も被災者なのに、なんで避難所の運営なんかしているのだろうと何度も思いました。未だに、私はあの時あれでよかったのか、正しかったのかわかりません。

大変なことも多かった避難所運営ですが、一方で、避難者の方から励まされたり、各地から物資とともに寄せられる温かいメッセージにたくさん救われました。最近になって子ども達も「母ちゃんあの時全然そばにいてくれなかった。でも、かがやきに母ちゃんがいなかったら大変だったよね」と少し理解を示してくれるようになりました。ある方に、『人を助ければ自分も助かる』と言われました。まさにそうだと思います。今でも、近隣の方々から「あの時はお世話になりました」と声をかけてもらえ、頑張っでよかったなと嬉しく思います。これを機に、これからも地域につながった学校であり続けるために、職員の一人、地域住民の一人として尽力していきたいと思ひます。

3 生徒の作文

高等部3年（当時）堀泰成君の作文より

くまもとは こわれていません。
そっちは どうかな？

じしんは こわかった。
ぼくが したで ゆっくりしていると
がたがたって てんじょうが ゆれたね。
だいじょぶかなって おもった。
ちゃわんが われたくらいです。

おみずが いったいだけ とまったけど あとは なんもない。
おみずが ありがたいことが わかった。

いまは がっこうもあって
おみせは あいているのは H I ひろせと ひかりのもりかな。

さんりぶくまなんは このまえ いったけど しゅうりしよらした。

これから おもしろいこと ないかなって さがしたいよ。
みんなもがんばってね。



在宅療養児 災害時の支援

熊本地震から2か月。発生直後は、重度障害があり、在宅で人工呼吸などの医療的ケアを受けて暮らす子どもたちも避難生活を送らなければならなかった。災害時に子どもたちの命を守るためには、どんな対応が必要なのか。被災地で奮闘したNPO法人の経験から考える。

(二谷小百合)

「自宅に戻ってほしい」。熊本市西区の西田あかりさん(45)は、安堵のため息をつく。長女の夏千花さん(8)は脳性まひ。胃に管で流し入れる「胃ろう」で栄養をとり、専用機器で自分の吸引も必要だ。

4月16日の本震後、夏千花さんが通う特別支援学校へ避難した。余震の危険を感じたのと、断水したり水の濁りが続いたりしたため、吸引器具の洗浄などに衛生面の不安を感じたからだ。

避難生活中、普段からたんの吸引などを受けている子どもをどうするかは重大な課題。子どもたちの安全を確保し、台風に先んじて入院させるなどの対策を講じた。

今回の地震でも、14日の前震後に中本さんから、電話が通じないなか、無料通話アプリ「LINE」で子どもの安全を確認。同日中に人工呼吸器を使う人を避難入院させた。本震後も、6人を素早く入院させている。「スタッフも私も訓練されているので、ネットで早く安全確認できたのがよかった」と中本さん。

しかし、適切な支援が受けられなかった子どもは少ない。同法人理事長で小児科医の島津智之さんは「周囲に連絡したり感染症を恐れ、被災後1か月以上たつ

訪問看護ステーション「スナップキッズ」の看護師、中本さん(左)から、安否を確認する連絡がスマートフォンにきた。ステーションは、熊本県合志市の認定NPO法人「NEXTSTEP」が運営し、県北部7市町村の手こたえを訪問している。

子どもをどうするかは重大な課題。子どもたちの安全を確保し、台風に先んじて入院させるなどの対策を講じた。

医療の進歩を背景に、人工呼吸や経管栄養などのケアを受けて自宅に暮らす子どもは増えている。文部科学省によると、特別支援学校の医療的ケアが必要な児童生徒は、2006年度の5901人から、15年度は8143人に増加。うち5

その教訓から、災害時に子どもたちを守る取り組みが各地で始まっている。横浜市の「在宅療養児の地域生活を支えるネットワーク」は今年2月、在宅療養児のための防災文化祭を開いた。医療的ケアを受ける子どもが地域に居ることを知ってもらい、住民からのサポートにつなげる試みだ。千葉県八千代市の八千代小児在宅医療研究会「チームやちよキッズ」は、医療機器の電源確保の仕方などを冊子にまとめ、今後は各家庭との連携も深める考えだ。

人工呼吸器、たん吸引：困難な避難生活

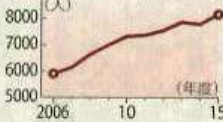
935人が通学生、1180人が家庭への訪問教育だ。こうした傾向のなかで起きたのが2011年の東日本大震災。多くの子どもが、避難生活で困難に直面した。

要援護者の把握

被災地で人工呼吸器を使う子どもに酸素ボンベを届け続け、在宅医療機器提供会社「アライフ」(仙台市青葉区)取締役の武山裕一さんは「機械の音を気にして避難所に行けなかったり、入院を断られたりして自宅まで通っていた子どもも多かった」と話す。

医療的ケアが必要な子どもが増えている

※特別支援学校在籍者・文部科学省調べ



避難生活乗り越え、今は自宅で看護師(左)から、たんの吸引などの医療的ケアを受ける夏千花さん(右)。(熊本市西区で)

障害のある子どもと家族の支援に詳しい神戸大の高田哲教授は、「在宅で医療を受ける子どもたちを、災害時の要援護者として普段から地域で把握し、個々の状態に合わせた援助が早くく行えるよう備える必要がある」と指摘している。